

cinema

心に残る映画

『ネバーランド』

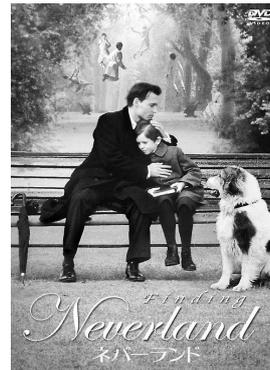
2004年／アメリカ・イギリス／マーク・フォスター監督作品

心を閉ざす子供たちへの深い眼差し

「ピーター・パン」の話は、誰でもそのさわりや、少なくとも登場人物くらいは知っているだろう。永遠の少年であるピーター・パン、妖精のティンカー・ベル、海賊のフック船長などなど、魅力的なキャラクターが、いつまでも子供でいられる国「ネバーランド」で冒険を繰り広げる物語だ。

映画「ネバーランド」は、この「ピーター・パン」の作者である劇作家ジェームズ・バリが、物語を創り上げるまでを描いた作品である。バリは、未亡人であるシルヴィアとその4人の息子たち、特に三男ピーターとのふれあいの中で、この名作を創造していく。ピーターは、父を亡くした悲しみから、「早く大人になろう」として心を閉ざし、子供らしい自由な想像の世界で遊ぶことを拒んでいた。そんなピーターに、バリは物語を創ることの喜び、空想の楽しさを伝えようとし、ピーターも少しずつ子供の心を取り戻していく。そうして完成した「ピーター・パン」は公演の初日を迎えるが、ピーターたちには再び試練がやってくる…。

バリ役は、ジョニー・デップが演じているが、彼を観てい



『ネバーランド』
DVD 発売中
発売元：
東芝エンタテインメント
3,990円(税込)

て私が特に印象的だったのは、ピーターをはじめとする子供たちに対して、彼が向ける眼差しの深さだろうか。バリは、子供たちの父親になろうとしたわけではないが、その眼差しは深く、温かく、そして優しい。

私は、弁護士として仕事をやるようになってまだ1年だが、心を閉ざし、早く大人になろうとする子供と出会った。この先もきっと、多くのそのような子供たちと関わることになるだろう。そのときに、自分が子供たちにどんな眼差しを向け、その閉ざされた心を開く手助けをしてあげられるだろうか。そんなことを考えながら観た映画だった。

この映画はいわゆる感動作だが、決して感動を観客に押しつけるようなところはない。穏やかな物語の中で、ファンタジーがあり、小さな笑いがあり、最後には自然に涙が流れているといった感じだろうか。もし、あなたが毎日の仕事に少し疲れていたなら、観ていただきたい映画だと思う。

(会員 小林 大祐)

『自分の中に毒を持って』

岡本太郎 著 青春文庫(青春出版社) 490円(税込)

作品から、言葉から、溢れ出るエネルギー

義母に誘われて川崎市にある岡本太郎美術館に行った。美術館入り口の自動ドアが開くと、目の前に、ニコッと笑った頬杖をついた埴輪のような大きな顔の彫刻が出迎えてくれた。岡本太郎というと、「芸術は、爆発だ」と大阪万国博覧会の「太陽の塔」しか知らず作品は一切見たことがなかったが、なんだかおもしろそうな美術館だなと思った。

館内を廻り終えると、期待を裏切ることなく、最初から最後まで見る者を全く厭きさせない作品ばかりであった。絵だけでなく、彫刻や変わった椅子もたくさん置いてあった。どの作品からもエネルギーが溢れ出ている、楽しくて仕方がなかった。

美術館では最後にお土産ショップが付きものだが、ここで本書に出会った。

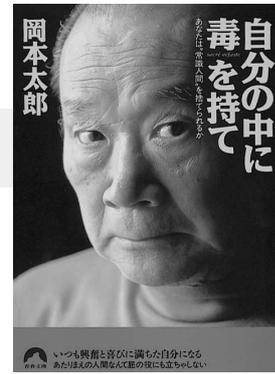
パラパラッと読んだところ、これはすごいと思い、迷わず購入した。作品を見たときと同じエネルギーがここからも溢

れ出ている。

なぜあれだけの作品を作ることができたのか、それは、岡本太郎氏が芸術＝生身の人間として生きることの瞬間、瞬間に命を懸けていたからだ。あの有名な「芸術は、爆発だ」という言葉に深い意味があったことを、本書を読んでではじめて知った。岡本太郎氏が生涯、自分に真正直に生きることを貫いた(真正直に生きることにできなかった)人だったということがすごく伝わってくる本でもあった。

また、所々、厳しく胸に突きつけられる言葉も出てくる。「最大の敵は自分だ」と岡本太郎氏に喝を入れてもらっているような気がして素直に受け止めることができる。

今は亡き岡本太郎氏だが、作品や著書から、これからもずっと人々に熱い思いを伝え続けるのであろうと思う。



(総合企画課 砂子坂 幸子)